

平成30年度

京都府立綾部高等学校由良川キャンパス(東分校)

定時制課程

# 学校経営計画

(スクールマネジメントプラン)

実施段階

平成30年度 京都府立綾部高等学校(東分校定時制) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
学力の向上と進路希望の実現 基本的な生活習慣の確立 基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性の育成 地域社会から信頼される学校づくりの推進 健康及び体力の維持向上	(成果) 原級留置や中途退学の防止については大きな成果が見られた。体育的行事や運動部活動には生徒の多くが意欲的に参加している。特に部活動(卓球部)においては、全国大会で団体の部ベスト8に進出する等、顕著な成績をおさめることができた。総じて落ち着いた雰囲気の中、生徒の多くが平穩に学校生活を送ることができた。 (課題) 生徒の学習意欲は依然高いとはいえない。生徒の興味関心をさらに喚起するべく授業内容・授業形態・評価方法を工夫する必要がある。将来に対して前向きな展望を持ち自分自身の進路希望を明確化することが困難な生徒が多い。生徒一人ひとりに対して、継続的できめ細かいキャリア教育を実施する必要がある。喫煙や飲酒、薬物乱用の防止について、生徒指導・教科指導・保健指導等、多様な観点から早期の指導を充実させる必要がある。集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感や社会性を身につけさせる必要があり、そうした観点から特別活動等の積極的な運用を検討する必要がある。	基礎学力の充実と「確かな学び」を実現する学習環境づくり 系統的組織的な進路指導体制の確立 豊かな人権感覚や国際感覚、シティズンシップの育成 健康安全教育の推進と部活動の充実 地域社会の活性化に貢献できる教育活動 4S(整理・整頓・清潔・習慣)運動の推進

分掌教科	項目(重点目標)	具体的方策及び数値目標	評価	成果と課題
1 組織運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校組織を活性化する。</li> <li>危機管理、法令遵守意識を高める。</li> </ul>	授業内容、授業形態等の工夫を促進するため、授業見学及び授業評価を複数回実施する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業見学、授業評価を複数回実施し、授業内容や授業形態の工夫を促した。</li> <li>法令遵守に関する研修を複数回実施することはできなかった。より緊急性の高い事業についての目標を設定するべきであった。</li> </ul>
		危機管理、法令遵守意識を高めるための研修を複数回実施する。	C B B	
		学校の様子を広く周知するため、ホームページの情報を遅滞なく更新する。	B	
2 教務部	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業改善に努め学力の向上を図る</li> </ul>	校務システムを効果的に運用し、教務関係文書を正確に遅滞なく作成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>校務システム及び毎日の連絡会を通じて、生徒の状態を細かく把握することができた。</li> <li>定期考査前や長期休業中に補習を行い、生徒の学力を向上させることができた。</li> </ul>
		教科担当・学級担任に教務関連情報を確実に伝達し、誤解や意思の不統一が生じないようにする。	B B	
		補習などを効果的に行い、生徒個々の学力を向上させることにより、全員を卒業進級させる。	B	
3 生徒指導部	<ul style="list-style-type: none"> <li>安心安全な学校づくりを行う。</li> <li>個々の発達段階に応じた指導を行う。</li> </ul>	問題事象が発生した際には、俊敏に対応し丁寧な指導を行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と日常的にコミュニケーションをとることで、問題事象の発生に迅速に対応し、事態が深刻化する前に適切に指導する事が出来た。</li> <li>例年ない行事として法律学習を京都司法書士会の協力で実施する事が出来た。</li> </ul>
		問題事象の発生を予防するため、各関係機関と連携して交通安全教室、非行防止学習、薬物乱用防止教室等を実施する。	B	
4 進路指導部	<ul style="list-style-type: none"> <li>将来の希望進路を明確化させ、生徒一人ひとりに対するきめ細かい支援ならびに取り組みを行う。</li> </ul>	個別支援の指導を定着させるため、全生徒に対する進路希望調査を学期に1回実施する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>月1回の計画で進路希望調査を実施し、生徒一人ひとりがどのような進路を考えているか把握することができた。早期に四者懇談を行った四年生においては、進路実現に向けた意識づけと受験に対する成果が得られた。</li> <li>他学年では、毎回の調査で未定と書き、記録上何も変化がない生徒への対応や就職や進学に向けた学習指導をさらに充実させ、ハローワークや外部機関との連携を図りながら、就労に向けたガイダンスの内容を検討していきたい。</li> </ul>
		自分に合った職業や進学先を選択できるようにするため、職種や資格ならびに入試に関わる情報を提供し、1年次の夏からインターンシップやオープンキャンパスに参加させる。	B	
		ハローワークや外部機関と連携しながら、卒業後の進路を見据えた情報交換を行い、企業が求める人材やスキルアップの方法ならびに進学実績を向上させる対策を1年次から系統的に行う。	B	
5 保健部	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身ともに健康的な学校生活を送らせる</li> <li>自身の健康について興味を持たせる。</li> </ul>	生徒の健康診断の受診率を75%以上にする。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>80%以上の生徒が健康診断を受診することができた。</li> <li>保健学習では講演前後でアンケートを行ったが、講演だけではなかなか成果が分からなかった。</li> <li>月1回保健だよりを発行し、さまざまな内容を生徒や保護者に伝えることができた。</li> </ul>
		自己肯定感についての保健学習において、事前と事後にアンケートを実施し、半数以上の生徒の自己肯定感を向上させる。	B B B	
		「保健だより」を月1回発行する。	B	

分掌 教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
6 人権 教育部	・差別意識の解消に向けた学習を行い生徒に人権意識を根付かせる	人権意識を養うため、講演等の人権学習を年2回実施する。	B	・2回の人権学習を実施した。障害者理解と高齢者理解について、講演や体験を通じて生徒もいきいきと活動でき十分な理解につながった。また教員にもアンケートを実施し、次の人権学習のアイデアを得た。 ・奨学金の情報を積極的に発信した。生徒が奨学金をより活用できるように、いっそう周知徹底したい。
		奨学金の情報を積極的に発信する。	B B B	
		人権学習において、教員にもアンケート調査を行い、人権学習の充実に役立てる。	B	
7 第1 学年部	・健全な生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	毎日の健康状態を確認し合い、お互いに安全で安心した学校生活を送らせる。	B	・登校時から教室や給食室で楽しく交流する雰囲気があり、日常会話から健康状態や興味・関心について認め合うことができた。 ・日直や美化活動などクラス内での役割を明確にし、「一人二役」の活動に対して取り組むことができた。 ・進路目標を明確にさせながら、学習した内容をきちんと日常生活や家庭学習に結びつけられるよう、これまで以上に各教科での予習や宿題に取り組ませたい。
		生徒の興味・関心を学習意欲に結びつけ、自分に合った取り組み内容や家庭での学習時間、将来の進路実現に向けた各自の学習状況を月1回調査する。	B B B	
		自分自身や相手の良さを見つけ、周囲との関わり方や社会性を身につけさせるため、クラス委員や「私の一人二役活動」において成功体験を獲得させる。	B	
8 第2 学年部	・一人一人の様子を把握し、生活習慣や仕事の面での安定をはかる。	日々のコミュニケーションを通して、生徒の様子や現状を把握する。	B	・日々のコミュニケーションを積極的にとり、家庭とも適切に連携できた。 ・生徒は総体やクラス行事、上級学校の見学会などに参加できた。 ・欠席しがちな生徒の登校状況を改善することができなかった。生徒の抱える問題について、関係機関とより綿密に連携をとること、また、生徒の学習意欲を引き出すことが今後の課題である。
		学校外の生活の様子を把握し支援するため、月1回以上、個人面談を実施する。	C B B	
		授業の様子や提出物の状況を把握し必要に応じて指導を行うため、教科担任に対するヒアリングを定期的に行う。	B	
9 第3 学年部	・生徒一人ひとりの学習状況や生活状況を把握し、きめ細かな指導を行う。 ・生徒が自分の進路について具体的なビジョンを持てるような指導を行う。	保護者と情報を共有するため、各学期1回以上、保護者との面談や家庭訪問を実施する。	B	・月に1回のペースで生徒と面談をすることができ、特に自分の進路について考える機会を多く持たせることができた。 ・生徒の情報を細かく把握するよう努めたが、得た情報を生徒の生活実態の改善に十分に活用することができなかった。
		生徒の様子を把握するため、登校時の立哨を毎日行い、得られた情報を教員間で共有する。	B B B	
		進路指導のための個人面談を月1回以上実施する。	B	
10 第4 学年部	・卒業と希望の進路実現を達成する。 ・社会に出た時に通用する豊かな人間性を育成する。	生徒の現状を把握するため、日々の学校生活で全員と積極的にコミュニケーションをとるとともに、毎月1回の個人面談を実施する。	B	・毎月1回以上の個人面談を行うことで生徒に対して卒業後の進路について綿密に指導することができた。 ・担任から欠席生徒に迅速に連絡することにより欠席理由を的確に把握することができた。 ・学年通信は2学期以降、発行回数が減少した。
		欠席、遅刻、早退の時は必ず連絡をさせ、連絡がない場合は担任が必ずその日中に生徒に連絡をし理由を聞く。	B B B	
		「学年通信」を月1回発行する。	C	
11 国語科	・生徒一人ひとりの「読み 書き 聞く 話す」といった言語活動を充実させ、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上を図り、社会生活に必要な思考力・判断力を身につける。	基礎学力の向上を図るため、漢字や語句の学習時間を確保し、週1回ならびに単元ごとに確認テストを実施する。	B	・生徒の言語活動を充実させる取り組みの一つとして、一行日記を書かせ、日常生活の中で話題になった事柄や興味・関心を表現する場を設けたり、グループでの活動に結びつけることができた。 ・長期休業中には国語に親しみながら取り組める宿題を計画し、その成果を授業で実感したり、カルタ大会での交流や生活体験作文での発表に展開させることができた。
		生徒の発言や興味・関心を通じて、自己表現の場を設定し、相互に評価させる。	B B B	
		国語を身近に感じさせ、ICT教材や時事問題に触れながら、人間や社会の問題について考える。	B	
12 地歴 公民科	・地歴・公民の基本的な事項を理解するとともに、社会に出た時に必要な知識や能力を身に付ける。	知識の定着を図るために、ICT機器を中心とする視覚教材を毎時間取り入れる。(地歴)	B	・特に地理では、ほぼ毎回ICT機器を使った授業を展開することができ、生徒の興味関心を引き出すことができた。 ・原因や背景を考察するような発問を設定し、それに対して生徒も積極的に発言してくれたが、発言が特定の生徒に限られおり、生徒間で意見を交わしたり、考えを共有するような場面が不足していた。
		学習した内容を踏まえて原因や背景を考察する機会を1単元につき1回以上つくる。(地歴)	B B B	
		月に1~2回程度ニュースや新聞記事など身近な事例を取り上げ、社会問題について生徒同士で意見を交わす場を設ける。(公民)	C	
13 数学科	・基礎・基本の数学的処理能力を定着させ、日常の数学的事象に気がつかせる。	意欲・関心を高める授業を行うため、日常生活に根ざした教材を利用する。	B	・電卓を使った数字遊びや黄金比、素数の話などを取り入れたり、関数の範囲では数学ソフトを使い視覚的にとらえさせることで生徒の興味関心を喚起した。数学を日常で活用できるような話題をいっそう提供することで、さらに生徒の学習意欲を高めたい。 ・授業の半分程度を演習に充て、進度の遅い生徒には教員がそばに付いて指導を行った。
		視覚的に数学的事象を理解させるため、全学年で3回に1回程度、パワーポイントや数学ソフトを利用して授業を行う。	C B B	
		基礎学力を定着させるため、授業時間内に演習の時間を十分に取るほか、チームティーチングを実施する。	B	
14 理科	・身近な事柄から理科に対する興味を持たせ、社会生活に必要な知識・能力を身につける。	生徒の興味関心を喚起するため、2時間に1回程度の割合で演示実験を実施したり、持ち込み教材やITC機器を使用する。	B	・パソコン・プロジェクタなどの機器や、個人作成教材、個人の教材などを持ち込み興味関心を少しでも引き出すよう努める事が出来た。 ・個々の学年の様子を見ながらプリント教材を併用することで定着を図ったが、学年により内容の深さが異なった。
		知識を定着させ、その利用方法を伝えるために、自然や日常的な事柄と学習内容を関連させる。	B B B	
		理科において必要な計算・知識について定着を図るため、プリント教材を使用して繰り返し指導する。	B	

分掌 教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
15 保健体育科	・保健、体育の授業を通して、生徒が心身ともに健康的に日々の生活を過ごすことができるための授業を展開する。また、生涯スポーツの観点から、多くの種目を通して卒業後もスポーツに積極的に触れ合う姿勢を育成する。	授業始めに必ずランニング2周と体操、ストレッチ(柔軟含む)を5分行う。	C	・生徒の実態から、授業始め毎時間2周のランニングは行うことができなかった。 ・すべての種目でプリントを作成し、筆記試験を行うことで競技のルール等を覚えさせることができた。 ・種目数については時間数の関係で4年生は7種目行うことができなかったが1、2年生では多くの種目に触れ合うことができた。
		それぞれのスポーツへの知識や理解、興味を育成するため、全ての種目で必ずプリントの資料を作成し、筆記試験を実施する。	B	
		多くのスポーツに触れ合う機会を持たせるため、1年間で7種目以上のスポーツを行う。	B	
16 英語科	・日常生活の中に英語があふれていることに気づかせて、身近に使われていることを実感させ、自分で学ぶことができる力を育成する。	生徒に知識を定着させるため、全学年、毎時間、授業中に単語テストを実施する。	B	・全学年にほぼ毎時間、単語テストを実施し、ノートをとるよう指導することで理解を深めることができた。 ・各レッスンが終了した時点で、プリントを解答させて、理解を深めることができた。
		生徒に授業内容を整理させ、理解を深めさせるため、毎時間ノートを回収し点検する。	B	
17 商業科	・高校で初めて学ぶ商業科目の面白さと社会生活に役立つことを実感させる。	簿記の仕組みを理解し、社会で役立つ知識を基礎からの積み重ねで理解させる。	B	・当初、簿記の学習に不安を感じていた生徒も、理解が進むにつれて興味を持ち、積極的に取り組むようになった。 ・簿記検定を受験させられなかったのが残念である。
		反復練習により理解を深めるため、プリントを活用する。	B	
		授業を大切にさせるため、ノート提出や課題作成等、授業中の取り組みを重視して評価する。	B	
18 芸術科	・基礎技術を充実させ、自ら表現する意欲を育てる。	授業規律を大切に作る。	C	・創作に対する姿勢に個人差があり、意欲がない生徒に対する指導については十分な成果が上がらなかった。 ・集中して取り組んだ生徒の作品の中には、完成度の高いものが見られた。
		授業時間を有効に活用し、完成度を高める姿勢を身につけさせる。	B	
		基礎から高度な内容まで表現できる幅を広げさせるため、技術差のある生徒が取り組める課題を取り入れる。	B	
19 家庭科	・自立する力を育成する。	身近な事柄を教材として選び、生徒の興味・関心を引き出すよう工夫する。	B	・身近な問題を取り上げることで、生徒の意識を高めることができた。 ・実習など体験的な学習には積極的に取り組ませることができた。
		体験的な学習課題を多く設定する。	B	
20 情報科	・現代社会における必須アイテムであるパーソナルコンピュータの操作に習熟させる。	タッチメソッドを習得させるため、タイプレスソフトによる反復練習を行う。	B	・情報モラル・セキュリティ教育を体系的に行うことができた。 ・生徒が安全かつ有効に情報機器を活用できるよう、今後も繰り返し指導していく必要がある。
		文書入力量を重視して評価し、欠席しないで取り組む生徒を評価する。	B	

学校関係者 評価委員会 による評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>一言で学力の向上といっても、学校に求めるものは生徒一人一人様々なので、そうした希望に応えることができる多様な課程が用意されている方がよい。</li> <li>綾部高校の生徒が学校生活を楽しんでいる様子は地域にも伝わっており、それが志願者の確保にもつながっているため、そうした雰囲気はこれからも大切にしてほしい。</li> <li>社会に出てから大切なのはコミュニケーション能力なので、生徒が様々な機会を捉えて、自分を磨いていけるような環境を作してほしい。</li> <li>そうした考えが学校現場になじむかどうかは別として、民間では部下が上司を選ぶ時代になっている。教員もそうした世の中の動きは自覚しておいた方がよい。</li> </ul>
-------------------------	---

次年度に 向けた改善 の方向性	<p>(成果)</p> <p>休学・転退学等の進路変更が1名、原級留置者が2名であった。生徒一人一人に寄り添ったきめ細かい指導の結果、原級留置・中退者数については、最低限に抑制することができた。体育的行事や運動部活動には生徒の多くが意欲的に参加している。特に部活動(卓球部)においては、3名の生徒が全国大会に進出する等、顕著な成績をおさめることができた。コミュニケーション力に課題があり中学校で学校に適応できなかった生徒についても、暖かい雰囲気の中、多くが落ち着いて学校生活を送ることができている。</p> <p>(課題)</p> <p>生徒の学習意欲は依然高いとは言いがたい。生徒の興味関心をさらに喚起するべく授業内容・授業形態・評価方法等を工夫する必要がある。将来に対して前向きな展望を持ち自分自身の進路希望を明確化することが困難な生徒が多い。生徒一人ひとりに対して、継続的できめの細かいキャリア教育を実施する必要がある。集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感や社会性を身につけさせる必要がある、そうした観点から特別活動等の積極的な運用を検討する必要がある。</p>
-----------------------	--